

日本大学入学おめでとうございます

大自然の中で発見する心の宇宙

四季折々、世界有数の自然を有する日本の山々。森の中で考え、星を眺めて森羅万象を解き明かす。かつて偉大な哲学者や思想家、科学者たちはそうしてきたに違いない。人生のほんの一時、混沌とした、退屈な日常から逃れて自然の中で考え、仲間と語り合ってみよう。そして一生の親友を得よう。山の本をたくさん読んでみるとさらに深みが増すはず。この瞬間をいかに輝いたものにできるかどうか。身体だけではなく、内面を高め、2度とない青春を悔いのないものにしよう。



日本人初の北極点到達1978年

未知のフィールドを求め彷徨う **日大山岳部** の伝統

1924年(大正13年)創部。明治生まれの人たちが創ったクラブなので当時はずいぶん厳しかったと聞く。今はすっかり変わってしまってこれが体育会のクラブ? と思えるほどソフトなムードで活動しているけど、やはり伝統の力はすごい。山は技術書にかかっているだけの小手先の技術で手に負えるものではないし、ガイドブックで紹介されているだけの登山を計画してもつまらない。すばらしい登山の計画は先輩方が蓄積してきた経験と技術と自分達の感性でひとつひとつ築き上げていくものなんだ。とくに日大の特徴は未知の山。日本にもこんなに静かで美しい場所があったのかと感動できる山をたくさん知っているクラブなんだ。もちろんフィールドは海外にもおよぶ。日本人初の北極点到達(1978年)、エベレスト北東稜初登頂(1995年)は有名だ。他の運動部と違って、登山は一生かかって作品を創り上げていく。



世界初のエベレスト北東稜完登1995年

アルピニストへの道

地形図を見れば立体的に山の景色が見えてくる。天気図を見れば明日の行動を予想できる。そして雪をいただいた山を見ていると冒険心が湧いてくる。それがアルピニストへと成長する一歩だ。情報が豊富になって事前に危険を知ることは容易になってきたけど、自然の厳しさは変わらない。山に入る前には事前の勉強や準備が大切。みんなですべて時には夜更けまで取り組むこともある。さらに若手OBで構成されたコーチ会と監督が親身になって計画を検討。登山は身体づくりも大切。装備の進歩で昔に比べればずいぶん荷物は軽くなっているけど、体力のあるなしで成否が決まってしまうことも多い。



ネパール・ヒマルチュリ南稜初登攀1986

四季、山の空気を肌で感じて学ぶもの

大学には登山サークルはいくつもあるけど、どうせやるなら山岳部だよ、絶対。夏は白馬岳で花の名前を覚えよう。雪渓が消えると同時に一面のお花畑。そして黒部の沢に入って岩魚を釣ろう。登山技術がなければ入谷できない北アルプスの真ん中だ。秋は紅葉の穂高で岩登り。やっとなのおもいで稜線に這い上がればコケモモが実をつけている頃だ。口いっぱいにはおぼつたのを潤そう。冬は剣岳をアタック。岩の殿堂、剣岳も冬は世界有数の豪雪地帯となる。苦しいラッセルも学生時代の楽しい思い出に。春はやっぱり北海道。雄大な大雪山や知床半島で山スキーを楽しもう。深い新雪もなんのその。無垢の雪原でパウダー散らして大滑降。そして次はヒマラヤだ。楽しみ方は先差万別。氷河を調査に出かけたり、動植物の研究、農業の実習だといって海外に学問のフィールドを求める部員も多い。日大は型にはまらないオールラウンドな登山も特徴なんだ。就職...各方面で活躍するOBの力を借りて一流企業に就職を決める部員も多い。

なぜ山に登るのか？

1923年、エベレスト初登頂を狙う英国の登山家ジョージ・マロリーが、記者から「なぜ山(エベレスト)に登るのか」と質問を受けて、「そこに山があるから」と答えた。質問に答えるのが面倒だったから適当に答えただけ、という説もあるが真面目に答えようとしたらたいへんに難しい。

山岳部の僕にでさえ「何で山に登るの？」と友人に聞かれることがよくある。考えてみると何で登山に対してだけこの質問が待ち構えているのだろうか？ 恐らく登山という行為につらいというイメージが定着しているからだろう。しかし、山に登るときの苦勞は他のスポーツに伴う苦勞と大して違わないと僕は思う。中学はバドミントン、高校は弓道とそんなに体を鍛えてこなかった僕でも何とかなった。特別山がつかなくて他は楽というわけではないのだ。

では、何故登山にそんなイメージを持っている人が多いのだろうか？ これは単純に登山を知らないからだと思う。登山を知るには登山をやってみるのが一番である。だからこれを読んで、少しでも興味を持ったなら連絡してみたい。実際に行ってみればどんなもんか分かるから。

山の楽しみ方はいろいろある。登る事自体が楽しいという人もいるし、そこから見える景色が好きだとか、大自然に触れているような気になれるとか人それぞれだろう。登り方もいろいろある。登山道を歩くのが一般的だが、岩の壁を登ったり、川を遡上したり、凍った滝を登ったり、いろいろある。その中で何をするかは自由なのである。自分が一番楽しいと思えることをすればいいのだ。楽しくない山登りをして仕方が無いから、是非新鮮なアイデアを持った新入生を迎えて、今までよりもっと楽しい事をしたいと思う。

主将 法学部3年 設楽琢磨

日大山岳部の一年

4年間、どんなに頑張っても学生の間には限りがあります。卒業のない社会人の山岳部ではベテラン・リーダーが指導してくれますが、学生のリーダーは3～4年の山の経験でリーダーをとり、そして卒業してしまう宿命を持っています。山岳部では登山計画の検討は若手OBで編制されたコーチ会が面倒をみますが、実際に山でリーダーをとるのは学生です。

長年山岳部が培ってきた技術や知識が脈々と継承され、山の楽しみ方、危険の回避等を高いレベルで実践しています。学生山岳部の最大の武器は準備と実際の登山にたくさんの時間をかけることができることです。社会人山岳部であれば5日間で終わる冬山山行も、学生山岳部は予備日を加えて10日間の日程を組むことができます。悪天時の行動や夜間まで長引く行動は基本的に行わないため、遭難のリスクはぐっと減ります。とは言っても状況によっては厳しい局面でも行動しなくてはならない時もあります。そのために普段からトレーニングを積んで、体力でカバーしてしまうのも学生ならではの事です。山岳部員はアスリートではありません。しかし普段からのトレーニングと勉強がとても大切で、実際の登山がとても楽しく充実したものになります。



高校時代、山岳部やワングル、他の運動部で体力に自信のあった新入生でも、大学山岳部2年部員とは大きな差があります。どんな入部者も最初の1年目は同じスタートラインに着いて基本から指導を受けます。昔の山岳部は新入部員が100人以上入って上級生はとても怖かったと聞きますが、時代は変わり、毎年わずかの新入部員を大事に育てていきます。登山経験は問いません。



新人合宿の初夏合宿は穂高連峰。新緑の梓川、いつかは登ってみたい前穂屏風岩を横目で見ながら残雪豊富な涸沢カールへ。ここで雪上技術の基本を学びます。まずは雪に慣れることが目標。奥穂や前穂、北穂、槍にもアタックできるかも。

大学生の特権、長い夏休みでぐっと力が伸びます。夏山合宿は立山、劔岳等で行います。劔沢や立山の東面カールには豊富な雪渓が残っていて1年中消えることはありません。ここにベースキャンプを設けて雪上訓練の応用編を行い、後半は岩登りの基本を学びます。さらに継続して岩登りや沢登り、さらに東北、北海道まで足を延ばすこともあります。穂高や劔では他大学も合宿を行っているので、交流も楽しみます。

秋山山行。紅葉の山々で縦走や岩登り、沢登りを楽しみます。下界では文化祭休み。秋山の登山に最適な時期なのでこの休みを利用しない手はありません。





10月には年に一度の**天幕懇親会**が信州田沢温泉で行われます。学生から戦前のOBまで、旅館を貸し切って深夜まで飲み明かし、翌日は近郊のハイキングに出掛けます。新雪の北アルプスを遠望し冬山に向けて気持ちを切り替えます。



11月は**初冬合宿**。冬山に向けて、雪上技術の仕上げを行います。以前は富士山で行われていましたが、最近は安全に考慮して八方尾根から五竜岳あたりで行います。

さて、我が山岳部の年間目標である**冬山合宿**です。年度初めにリーダー会で目標の山を決め、1年間積み重ねた成果を発揮する山行です。4年生は最後の合宿となります。劔岳、槍・穂高、表・裏銀座、白山、越後、南アルプス、東北の山々。世界でもまれに見る気象条件の厳しい日本の冬山を克服出来ればヒマラヤの高峰もぐっと引き寄せることになります。日大山岳部の冬山は岩より雪のルートを選ぶ傾向があります。かつてから「雪の日大」と呼ばれてきました。雪上の技術はレベルが高く、他大学に負けない自信があります。



2月、4年生が卒業し、リーダー交代が行われます。**2月山行**は八ヶ岳や中央アルプスなど比較的好天に恵まれる山域でアイスクライミングや岩稜登攀を短期で楽しめます。スキーが好きなら東北まで足を伸ばして山スキーも魅力です。

春山合宿。冬山合宿を経験した1年生はすでに新人ではありません。3月は豊富な積雪、好天の日が続くため、スケールの大きい積雪期山行が可能となります。北アルプスはもちろん、南アルプス、北海道の知床、大雪、日高、利尻など対象のエリアはぐっと広がります。4月の新人勧誘では、真っ黒に日焼けした山岳部員が新入生に声をかけていることでしょう。



5月山行は新入生を加えて初心者向け山行を行う場合もありますが、主に上級生だけで少々難度の高い登山を目指すのに最適な季節です。

トレーニング

主に自主トレです。ランニングは欠かせません。11月に皇居で大学対抗の**日本山岳会学生部マラソン大会**が行われます。各大学山岳部の名誉をかけてがんばります。日大は個人戦3連覇中



準備会

各合宿の前には登山勉強会が開かれます。「目的と意義」、「地形と概念」、「リーダーシップ・メンバーシップ」、「生活技術」、「ファーストエイド」、「岩登り技術」、「雪渓(氷雪)技術」、「山の気象」、「雪崩」。その他目的に応じて「スキー技術」、「沢登り技術」等。頭に詰め込みます。

登山の費用

合宿の交通費、共同装備購入、事務費は大部分部費から出費します。個人装備、個人山行の交通費等は自己負担となります。他大学の山岳部に比べると最も恵まれていると言われています。

OB会と海外遠征

1924年創部。卒業生420名(物故者含む)、OB数250名。若手OBからなるコーチ会が学生の指導を担当します。主な海外遠征は、1962 ネパール・ムクトヒマール(ホングデ峰初登頂)、1965/66 第1・2次グリーンランド、1967 スピッツベルゲン、1968 第3次グリーンランド横断、1969 東グリーンランド、1970 ネパール・シタ・ツツラ初登頂、1974 ヤルンカン、1974 マッキンリー、1978 北極点、1978 アラスカ・マーカスパーカー、1981 ネパール・ヒマルチュリ、1985 ネパール・クスムカン、1986 ヒマルチュリ南稜初登攀、1990 ネパール・アイランドピーク、1994 マッキンリー、1994 チョーオコー、1995 エベレスト北東稜初登攀、2000 ネパール・メラピーク、2004 中国チベット・クーラカンリ等。その他、個人的な海外登山もたくさんあります。

日大山岳部の登山技術と遭難対策

雪の日大

積雪期登山を数多く経験することで、卒業時にはりっぱなアルピニストとなって、国内はもとより、海外のどんな山でも挑む力がついていることでしょう。アイゼン・ワーク、ピッケル・ワーク、スタカット登攀、コンティニアス登攀、タイトロープ(ショートロープ)技術、アイスクライミング...。天候を読むことも重要な技術です。西高東低気圧配置、二つ玉低気圧、移動性高気圧、爆弾低気圧...。さらに冬山には雪崩のリスクが伴います。雪崩ビーコン、スノー・シャベル、ゾンデ棒(プローブ)これら3点は全員各自で携帯し、山行前には雪崩搜索訓練を反復練習します。学生の山行中、OBは万が一に備え待機します。

新入部員大募集!

山登りは体力に自信のある、いかつい男たちのものだと思いませんか？ しかしアウトドアは細分化され、様々な楽しみ方ができるようになってきました。フリークライミングは定着し、専門の部員もいます。パウダーを求めてバックカントリースキーも増えています。自然が好きで、山登りに少しは興味のあるあなた。4年という限られた時間を山岳部で過ごし、“何か”を手に入れてみませんか？ 女性部員、マネージャーももちろん歓迎です。下記にアクセスしてください。

E-Mail info@nualpine.com HP <http://www.nualpine.com/> TEL 090-5764-6290 設楽(しだら)まで

部室

都営三田線「千石駅」徒歩5分に日大山岳部部室があります。山岳部OB所有アパートの一室です。装備棚、書庫に囲まれ、会議テーブル、パソコン他、フリークライミング・ボードが備えられています。光ケーブルが入っているのでインターネットも使えます。宿泊も可能。

〒112-0011

東京都文京区千石1-16-8

(錦輝堂書店の裏)



ロープワークをおぼえよう!

雪崩対策装備を携帯しよう!

8の字結び



クローブヒッチ



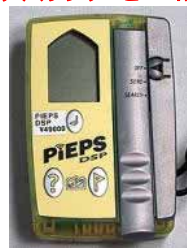
ダブルフィッシャーマンノット



ムンターヒッチ



アバランチ・ビーコン



ソンド棒(フロープ)



スノー・シャベル

